

月刊

AMDA

国際協力

Journal

5

MAY

2001.5.1

(VOL.24 No.5)





カンボジア・チャンバック小学校再建プロジェクト
新しい教室、新しい遊具を子どもたちはとても喜んでくれました



AMDA
国際協力
Journal

2001
5月号

CONTENTS



AMDA 高校生会による
カンボジアでの小学校開校式
出席報告会



カンボジア・チャンバック小学校再建プロジェクト特集

完成報告	2
開校式	3
AMDA 高校生会/(株)ウエスト報告	4
ザンビア報告	6
ケニア報告	8
アンゴラ報告	9
バングラデシュ報告	10
ミャンマーインターン報告	12
スタディツアーアンケート	14
ホンジュラス報告	18
国際協力ひろば	19
人・海外往来	21
人	22
寄付者一覧	23
事務局便り	24



表紙の写真

カンボジア・チャンバック小学校再建プロジェクト
(3月14日開校式に集った地域の人々)

AMDA高校生会が開始したこのプロジェクトは多くの皆様のご支援のもと2年の歳月をかけてチャンバック小学校再建の運びとなりました。

老朽化の進んでいた同小学校はコンクリート建ての新しい校舎へと生まれ変わり、校名もカンボジア・日本フレンドシップ小学校へと改称されました。

開校式に出席したAMDA高校生会メンバーは彼らの地道な活動の成果を目の当たりにして感激も一入のようでした。そして帰国後、報告会を開くとともにこのプロジェクトを始めたAMDA高校生会の先輩たちに写真を添えた報告書を送りました。

書き損じハガキを集めています

- *書き損じのハガキ、未使用の切手・ハガキ、各種プリペイドカード等がありましたらAMDAにお送り下さい。
- *使用済テレホンカードは収集しておりません。

【送り先】岡山市榎津310-1 AMDA事務局
お問い合わせは、TEL 086-284-7730
FAX 086-284-8959

ご協力お願いします

AMDA 会員ネットワーク
参加者募集

- <amda-jnet@amda.or.jp>
AMDA 会員とのインターフェイス機能を目的とし、AMDAの動きをリアルタイムでお知らせできます。
(AMDA 速報・イベント案内・人材募集)

ご希望の方は <member@amda.or.jp>
まで、住所、氏名、電話、FAX に併せお申込み下さい。
AMDA 会員情報局

「CAMBODIA JAPAN FRIENDSHIP SCHOOL」 完成報告

～チャンバック小学校再建プロジェクト～



コミュニティーサービス局
伴場 賢一

さかのぼること半年ほど前、カンボジアの雨季の中で最も降雨量が多い時期、雨に濡れ果て黒くたたずんだ建物、初めて見たチャンバック小学校は物質社会に住む私にとってとても子どもたちが教育を受けられる場所とは思えなかったといっても過言ではありませんでした。

そんな状況の中、2年前から現地の強い要望に応え AMDA 高校生会がスタートしたチャンバック小学校再建プロジェクトは、さまざまな皆様のご好意のおかげで新校舎（名称：Cambodia Japan Friendship School）が完成し3月14日開校式を迎えることが出来たことを報告させていただきます。

建物は平屋建ての2棟。4つの教室と、職員室、当初の予定では図書室として利用する予定だった部屋は図書室と兼用して AMDA が継続的に支援してきたデイケアセンターの幼児たちも利用できることになりました。

その他に、給水・電気に雨水を利用するトイレも完備され、晴れ晴れとした青空のもと、のどかな風景の中に白い壁と赤い屋根の校舎は一層誇らしげに建っています。

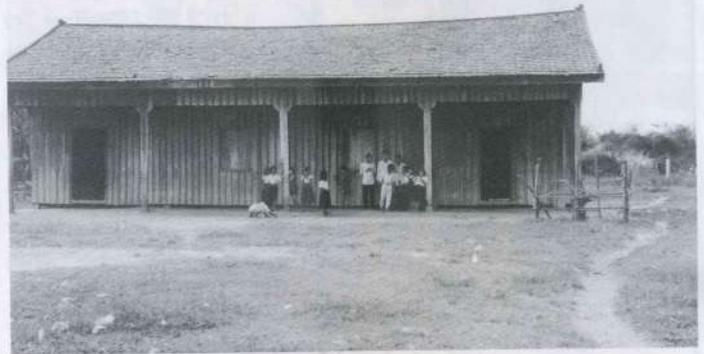
カンボジアでは長年続いた内戦、そしてポルポトによる肅正と言う名の大量虐殺（虐殺の対象は主に公務員・教員・エンジニア・医師などの知識階級であった）により、国を担う人材の不足、さらには安定した教育が受けられない事が危惧されています。

それだけに教育に対する思い入れは大きく、また小学校がコンポンスプ州で初めてのコンクリート建ての小学校であることから開校式には現地から全校生徒はもちろん代議士・州副知事、日本側から在カ日本大使館の渡辺2等書記官・(株)ウエスト・AMDA 関係者を始め1,500人もの人たちにご出席いただき盛大に執り行われました。

開校式の後、日本から参加した4名の AMDA 高校生会メンバーがそれぞれに出来たばかりの教室に集まった児

写真右
前チャンバック
小学校

写真下
カンボジア-日本
フレンドシップ小
学校として生まれ
変わった前チャン
バック小学校



童たちへ、思い思いに折り紙・縦笛・簡単な日本語の紹介を行いました。ほんの1時間程度の時間でしたが、初めは恥ずかしがっていた児童たちも次第に打ち解けて、遠いところからやってきたお兄ちゃんお姉ちゃんと一層目を輝かせながら楽しい時間を過ごしました。

最近の日本のニュースでは、高校生への犯罪・凶悪犯罪の低年齢化などが取り上げられていますが、言葉も文化も分からない異国でこうしてボランティアを行い、自らアルバイトをして旅行費用を賄った高校生がいることが日本人として、とても誇らしく思えます。

今回の再建プロジェクトはこれからが本番です。先の理由の通りカンボジアで直面している問題の少しでも手助けになるように、また首都プノンペンと比べ地方都市とは大きな格差が見ら

れるため、AMDA では今後もこの Cambodia Japan Friendship School をモデルケースに、現地の希望を聞きながら、地域教育の場として、地域開発を行っていきたく考えています。

今後とも皆様の変わらぬご支援ご理解を賜れますようよろしくお願い致します。

最後になりましたが、今回のカンボジア・チャンバック小学校再建プロジェクトへ多大なご支援をくださった(株)ウエスト様、ジャスコ(株)岡山店様、カトリック広島教会関係の皆様、街頭で募金をしてくださった皆様、ご協力をいただいた皆様、そして何よりも街頭で声を張り上げ募金活動を続けてくれた AMDA 高校生会のメンバーたち本当にありがとうございました。

カンボジア—日本フレンドシップ小学校の開校式

2001年3月14日(水)、コンボンスプー州プノンスローチ地区

◇
シエン・リティ (Sieng Rithy) 医師

AMDA カンボジア代表

翻訳 藤井倭文子

カンボジア—日本フレンドシップ小学校(前チャンバック小学校)は、AMDA 高校生会と日本の建設会社(株)ウエストとの共同で2000年12月1日に着工され、2001年3月7日に完成した。

この学校は2棟からなり6部屋に分かれている。

○4部屋： 小学校

○1部屋： 幼稚園兼図書館

○1部屋： 職員室及び図書室

その他に6つのトイレ、給水及び電力設備、運動場等を建設した。建設完了後、テーブル、椅子、ホワイトボード、戸棚及びその他の事務用品等、学校に必要な備品を提供した。

AMDA とカンボジア王室政府との協力を得て、2001年3月14日にその開校式がとり行なわれた。

式典の参加者：

1) カンボジア駐在大使館：渡辺二等書記官

2) カンボジア王室政府：

H.E. Say Chhum, High Representative of Samdech Hun Sen カンボジア首相及び国会議員

H.E. Bun Sok, 教育省次官

H.E. Kang Hean, コンボンスプー州副知事

H.E. Hem Khan, 国会議員

H.E. Ly Son, 国会議員

Mr. Tep Mean, プノム・スローチ地区知事

Mr. Sam Somota, コンボンスプー州教育部門理事

Mr. Pen Seun, プノム・スローチ地区教育部門理事

約50人のコンボンスプー州 職員

3) (株)ウエスト関係：

佐々部宏(株)ウエスト部長、藤原幹久(株)レーベル会長、早川リチャード良一(株)MAS 社長

4) Treng Traying コミュニの学校からの参加者：

○生徒 500人

○教師 40人

(カンボジア—日本フレンドシップ小学校、及び Treng Traying コミュニ中学校の二校から)

5) AMDA：

AMDA カンボジア：シエン・リティ(医師)、ロング・ピセス(医師)、ベン・ポプ・カニッサ

AMDA-ADB：藤野タケオ

AMDA 本部：伴場賢一、三宅和久(医師)

AMDA 高校生会：千先翔子、寺門宏枝、渋谷未来、川上侑希

6) その他の参加者：

○一般参加者 600人

○聖職者 70人

○僧侶 7人



開校式で小学校再建プロジェクトの報告をする筆者

最初に、AMDA カンボジア代表である私が学校建設に関する報告をし、次いで、コンボンスプー州副知事がAMDA と(株)ウエストの出席者に対し歓迎の辞を述べた。

次に、AMDA 本部を代表して三宅医師の挨拶があり、続いて渋谷未来さんがこの式典に参加する喜びと日本とカンボジアの高校生との交流について提案した。

(株)ウエストから、佐々部氏が挨拶をし、“カンボジアの教育プログラムを支援する意向、全生徒にこの新しい学校で一生懸命勉強し、将来社会に出て役立つ人になって欲しい”との願いをこめた吉川社長のメッセージを代読した。

次に、日本政府を代表して渡辺氏が日本とカンボジア間の協力、特に医療、教育、及びその他の開発プログラムに関する日本からカンボジアへの支援について述べた。

H.E. Say Chhum が王室政府を代表して挨拶し、カンボジアの教育事情について説明し、同国の再建のために広範囲において支援の手を差し伸べて下さった日本の支援者と日本政府に対しカンボジア王室政府から深く感謝の意を述べた。

全スピーチの終了後、H.E. Say Chhum と H.E. Bun Sok が(株)ウエスト吉川社長の代理、佐々部氏とAMDA インターナショナル理事長菅波医師の代理、三宅医師に国家建設勳一等ゴールデンメダルを授けられた。

式典はテープカットに次いで、生徒にノートや鉛筆等を配り閉会した。

その後、AMDA 高校生会のメンバーは、デイケアセンターの小さな子ども達におもちゃを配ったり、子ども達はカンボジアの童謡を披露しAMDA と(株)ウエストの出席者を歓迎した。

式典は成功裡に終り、この地域の住民はAMDA と(株)ウエストの支援に対し心から礼を述べた。

この学校の今後の計画として、カンボジアと日本の間の協力、結束、フレンドシップについて人々に紹介出来るよう日本の学校と姉妹校縁組を結びたいと願っている。

カンボジア・チャンバック小学校開校式に出席して

AMDA 高校生会 川上 侑希

僕たち AMDA 高校生会の4名は3月14日にカンボジアのチャンバック小学校の開校式に参加しました。

僕は AMDA 高校生会に入ってから2年間ずっとこのチャンバック小学校に関わっていたということもあってこの前の日からもう既に頭の中はチャンバック小学校でいっぱいでした。

そして迎えた当日、小学校があるとところまでプノンペン市内から車で1、2時間ほど掛かりました。学校周辺の様子はというと、プノンペン市内とは打って変わって落ち着いていてとてもどかな雰囲気でした。

車から降りて、目の前にある小学校の門をくぐると、1,500人もの人が日本とカンボジアの旗と拍手で僕たちを迎えてくれました。やはりその中を通っていくのは嬉しいやら恥ずかしいやらで何か複雑な感じでした。そしてその群衆をくぐり抜けると、左右に2つドーンと建っている小学校が目に入ってきました。それを見て最初に思ったことは「はぁ小学校お」って感じでした。でもだんだん実感がわいてきて自分の席に着いた時にはまともに校舎が見れなくなっていました。

そしてセレモニーが始まり来賓の方々のスピーチが2時間以上も続きました。その中で AMDA 高校生会を代表して今回一緒に行ったメンバーの一人である渋谷未来さんも英語で「AMDA 高校生会は今後もカンボジアの皆さんと協力しあいながら活動を続けていきたい」とスピーチをしました。そのスピーチも無事終わり、テープカットを行い、教室に入り生徒たち一人一人に高校生会から用意したノートと鉛筆をプレゼントしました。みんな嬉しそうに受け取ってくれました。

セレモニーが終わり次に小学校の生徒たちと、小学校の一角にあるデイケアセンターという保育所の子どもたちとの交流会をしました。デイケアセンターでは僕たちが日本で集めたぬいぐるみをプレゼントしました。

その後にデイケアセンターの子どもたちが歓迎の歌を歌ってくれました。



その歌を聴いたとたんに僕はこのプロジェクトに携わってきた2年間が脳裏に浮かび、胸が熱くなり目に熱いものが感じられました。僕たちはその歌のお返しにカンボジアに来て毎日移動の時などを利用して練習していた「ふるさと」をリコーダーで演奏しました。最初はリコーダーだけで演奏し、2回目にそこにいた日本人みんなの歌付きで演奏をしました。デイケアセンターの子どもたちも喜んでくれてたようでした。次にチャンバック小学校の生徒たちが居る校舎へ移動し、各クラスに一人ずつ入り、折り紙やあやとりなど日本の遊びを教えました。言葉は通じないけど一生懸命伝えようと思えば伝わるのだなあと思いました。小学校の生徒とは時間も押し迫っていたこともあって、あっという間に時間が過ぎてしまいました。小学校の生徒たちとち

よっとの時間しか触れ合うことができなかつたことだけが唯一このセレモニーでの残念なことでした。

振り返ってみるとやっぱりこのチャンバック小学校を再建することができて本当に良かったなあとと思います。このセレモニーが終わってもまだ僕の頭の中はチャンバック小学校です。それだけ僕にとっては実際に「チャンバック小学校を見た！子どもたちと会えた！」というのは衝撃的なことだったので。

絶対また何年か経ったらあの地を訪れたいと思います。そして今度はちゃんと現地語をしゃべれるようにしていっぱい生徒たちと触れ合いたいです。最後になりましたが、このチャンバック小学校再建プロジェクトにご支援、ご協力くださった方々、どうもありがとうございました。

心が豊かな国だった

渋谷 未来

カンボジアから帰ってきた今、心からそう思う。物質的には決して恵まれているとは言えないのに、そこには日本では感じることのできないぬくもりがあった。好奇心旺盛な子ども達の瞳、素朴な笑顔。その一つ一つからたくさんパワーをもらった気がする。言葉が通じない分相手の言っていることを理解するのは難しかったが、「分かり合いたい」と思う気持ちがあれば、自然と通じ合えるものだったと思った。

私のカンボジアでの一番の仕事は開校式でのスピーチだった。大勢の人の前でスピーチは本当に緊張したが、何とか無事に終わることができてホッとしている。でも本当は、スピーチを読む事よりもカンボジアの子ども達と同じ時間を共有できたことの方が、私にとっては重要だったと思う。「学校は好きですか？」という質問に、元気よく「はい!」と答えてくれた子ども達。その姿を見て、今まで頑張ってきた本心に良かったと、胸が熱くなった。

最後に、今回お世話になった全ての人に心から感謝し、チャンバック小学校の芳賀帳に私が記念に残してきた言葉を記そうと思う。

未来を担うチャンバック小学校の子ども達へ
「一緒に未来を作っていきましょう。」

ついに来たんだ!

千先 翔子

3月12日午後1時20分、予定より1時間以上遅れてプノンペン空港到着。タラップを降り、むわっとした外気に触れると、何か熱いものがこみ上げてきました。

今回カンボジアを訪れたのは2年間高校生会が再建のための活動に関わってきた、チャンバック小学校の開校式に参加するというのが一番の目的だったわけですが、その開校式では大勢の子ども達がとびきりの笑顔と拍手で出迎えてくれ、2年間（私が参加したのは1年間ですが）の活動が実を結んだのだなあ、と改めて実感しました。

やはり自分たちの活動に対する現地の方々の反応をじかに確かめられる機会はなかなかないので得たものは大きく、今後の活動にもそれを生かしていければと思います。

又、現地の状況を目の当たりにして強い衝撃を受けました。物乞いをする人や小さい頃から学校へも行けず商売をさせられている子ども…そういった人々がいる、ということは把握していましたが、その数が想像以上だということを感じ知らされ自分がいかに恵まれているかを思わずにいられませんでした。

ただ、そうした貧しい人たちが多いのは事実ですが、町、特にプノンペン

は活気に満ち、行き交う人は皆生き生きとした表情をしていました。人擦れしていないせいか、澄んだ瞳が今も忘れられません。よく「目は心の窓だ」と言いますが、本当にその通りだと思います。

最後になりましたが、道中お世話になった三宅先生や伴場さんをはじめ、AMDA職員の方や、このプロジェクトをすすめてこられた多くの先輩方を含めた高校生会のメンバー、そして私を支えてくれた友人や両親に感謝を述べて筆をおきたいと思います。本当に有難うございました。

行ってよかった

寺門 宏枝

チャンバック小学校の開校式の時のすごい歓迎にはびっくりした。

私はプロジェクトに参加した期間が短かったけどとても感動した。私よりずっと前からプロジェクトに参加していた他のメンバーの感動はもっとすごかったと思う。カンボジアに行ってカルチャーショックで辛くなったり悲しくなった時もあったけどカンボジアに行ってホントに良かった。確実に自分にとってプラスになった。自分にとって良い人生勉強になった。

今回の旅行でお世話になった三宅先生、伴場さん、AMDAのみなさん、本当にありがとうございました。

チャンバック小学校再建プロジェクト完成に寄せて

◇
(株)ウエスト 開発本部 部長 佐々部 宏

今般のチャンバック小学校再建のセレモニーにおいて、当社社長吉川に急な所用が出来たため、当社を代表し私、このプロジェクトに共感いただいた一つ橋総研の理事で(株)MAS社長早川良一氏・(株)レーベン会長藤原幹久氏の3名が当地に赴きました。

ちょうど6ヶ月前、吉川社長以下4名で当地を訪問し大勢の児童たちの期待を受け参加したAMDAのカンボジア・チャンバック小学校再建プロジェクトは、あの崩れそうな校舎が大変立派な校舎に生まれ変わり、美しく整備された校舎の中庭でコンボンスプー州を挙げてのセレモニーが行われました。在カンボジア日本大使館より小川大使の名代として渡辺2等書記官が出席され、日本政府としてこのようなプロジェクトを達成させたことに対する大いなる感謝の言葉を頂戴し、またカンボジア政府よりフンセン首

相からの感謝状とメダルがAMDAさんと当社に付与されました。

この感謝感激を報告し、社員一同更なる共感の輪を広げていく所存であります。蛇足乍、当社の岡山のショールームにてカンボジア・チャンバック小学校再建プロジェクトの資料を展示させて頂いておりますので、お近くにお立ち寄りの際は是非ご覧ください。

また今後もこの小学校の維持を目的に「ウエスト国際貢献カード」を発行し売上金の全額を活動資金として協力して参りたいと思います。

最後に今回の意義あるプロジェクトに参加させて頂いたことに対し、AMDAの関係者の皆様、日本政府、カンボジア政府、並びにカンボジアの皆様に『ありがとうございました』と申し添えます。

ザンビア共和国でのJICA-NGO連携 プライマリー・ヘルスケア・プロジェクトの調査報告

調査派遣者 近藤 麻理

私は、2000年12月25日から2001年2月4日まで、アフリカ大陸の南部ザンビア共和国の首都ルサカ市でプライマリー・ヘルスケア（PHC）プロジェクトの調査に行ってきました。ここでは、JICAとNGOとの連携事業としてプライマリー・ヘルスケア（PHC）プロジェクトを1997年より5年間の予定で実施しています。現在は、AMDAから4名の人間味あふれる優秀な専門家が活動しており、AMDA会員として非常に誇らしく思いました。このプロジェクトは、ルサカ市地域保健管理チーム（LDHMT）をカウンターパートとし、急増する都市人口とコンバウンド（貧困地区）の健康問題改善に取り組んでいます。プロジェクト期間終了を2002年3月に控え、現在では、①パイロット地区でのコミュニティベースのプライマリー・ヘルスケア（PHC）の推進、②ルサカ地区におけるヘルスセンター（HC）機能向上とレファレル体制の確立、③ルサカ地区における学校保健モデルの構築、この3領域を軸にして活動が行われています。

今回の調査では、このPHCプロジェクト実施中に形成された3つの住民組織の自立発展性と継続可能性について調査し、帰国後の報告書にはその結果と提言を取り纏めました。①コミュニティ・ヘルスワーカー（CHW）、②KOSHU有料トイレ委員会、③ジョージ地区環境保健衛生委員会（GEHC）、この3つの住民組織が今回の対象です。現地での調査は、住民組織リーダーやPHCプロジェクト専門家からのインタビュー、そしてAMDAザンビアが中心となって実施した住民参加型のワークショップ「住民組織の自立発展性について」などから行いました。私がまず驚いたのは、住民参加型のワークショップを実施するに当たり現地のヘルスセンター職員である看護婦、

管理栄養士、環境衛生士の方々が、非常にすばらしいファシリテーターとしてのスキルを既に持っていることでした。彼らは、PHCプロジェクトのカウンターパートでもあり、今後の地域における住民組織自立発展の支援者・指導者として重要な役割を果たします。4年間のプロジェクト実施中に確実にリーダーが育ったことは、大きな次への希望につながります。

外国からの支援は無限に続くのではなく、必ず実施期間と言うものがあります。ですからプロジェクトが終了後も、現地の人たちがどのように運営・



コミュニティ・ヘルスワーカー（CHW）がジョージ地区で子どもの体重測定をしている

実施していくことができるかを考えなくてはなりません。その考えが無ければ、プロジェクトが全く消えて無くなることも有りますし、害を及ぼすこともあるのです。外国への支援で最も考慮されるべき点は、プロジェクトの継続性であり、結局はプロジェクトが住民やその国にとって本当に必要性の高いものなのかが問われることとなります。

次に驚いたのは、住民組織が行っている勉強会やワークショップに参加した時の住民の積極的な意見や自分の役割に対する意識の高さでした。アジア、特にタイの住民活動を多く見てきた私にとって、自らの意見を堂々と述べると言うことは新しい発見でした。アジアは上からの力が強すぎて、住民

代表はやや良い生徒ぶったところが抜けないため、どの意見を聞いていても画一的でつまらないのが普通でした（これはあくまでも私見ですが）。ですから、そのとき直感で「ザンビアはやれるかもしれない」と思ったのでした。

さて調査の結果、次のようなことが明らかになりました。

①コミュニティ・ヘルスワーカー（CHW）は、ジョージ地区に暮らす人々のコレラなど感染症の予防、乳児の継続的な体重測定などをヘルスセンターの指導のもと実施し、住民組織の中心的な役割を果たしています。そして、3ヶ月に一度のヘルスプロモーションキャンペーン実施などを通して300名以上の住民が参加し、健康教育に大きな影響力を持っているのです。6週間の養成コース終了により健康教育の知識があり、そのリーダー達が成長している現状を考えると、今後短期的に経済的支援を他の住民組織やNGOから求めるとしても、CHWの存続は必須であると言えるでしょう。経済的自立運営にあたり大きな課題を残すものの、将来的に

はリーダーのもとで自立の道を考え実行することが期待できると思うのです。②1999年12月31日、リランダ・マーケットとバス乗り場がある中心部にKOSHUと名前の付けられた有料トイレが開設しました。住民への環境教育を含めて、住民組織の経済的自立運営を目指して作られたものです。トイレ正面には小学校の子供達が描いた絵をもとに鮮やかに描かれた目を引く壁画があります。有料ですから200クワチャという町の公衆トイレと同じ料金が設定されています。現地の人たちは、このトイレはザンビア中で一番清潔で美しいトイレだと教えてくれました。1年後の2000年12月のトイレ利用者数は、経済的自立運営可能な一日平均利用者数が100名を越えました。です

から今後は、他住民組織の自立のモデルとしても、発展が大いに期待できる組織であると言えるでしょう。

③ジョージ地区環境保健衛生委員会 (GEHC) はワークショップで計画した活動内容を自立運営を念頭に置き実施しているため、住民組織メンバー一人一人の経済的自立への意欲は非常に高いと言えます。ジョージ地区での重要な環境問題の課題として、ゴミ収集、家庭用トイレの設置、排水路、健康教育などに重点を置いた活動を実施しています。今後、ゴミ収集時に少額なお金を集めることとなりますが、これにより住民の参加が減少しないことを期待したいものです。

私は今回の調査から、ジョージ地区における住民組織の自立発展と継続の可能性は高く、PHCプロジェクト終了2002年3月までの一年間で、次のような住民組織の強化により安定した住民活動が可能となると考えました。

①ヘルスプロモーションキャンペーンによる地域活性化の継続、②住民参加型ワークショップの開催、③行政側から住民への支援、④住民組織運営能力をつける、⑤ヘルスセンターとNGOからの継続的支援、⑥人材の育成の6点です。このようなことは、短期間しか関わることのなかった私が言うまでもなく、現地の専門家たちはすでに動き出していることでしょう。

さてAMDA ザンビアはどのような活動を展開してきたのでしょうか。1998年9月よりスタートし、PHCプロジェクトの社会開発分野における連携を行っています。その目的は、ジョージ地区で生活する人々の健康状態の改善と、貧困問題への取り組みにあります。また現在の主な活動は、①洋裁教室、②識字教育、③コミュニティー農園運営、④マイクロクレジット (小規模融資はパウレニ地区で実施) の4つの活動が実施されています。特にコミュニティー農園の運営に関しては、昨年度より試行錯誤を繰り返しながら作物を育ててきました。私の滞在中には、青々とした大豆が立派に成長していました。これをどのように換金していくか、販路を見つけることは住民だけでは行えません。ですから今後、住民としっかりした話し合いを持ち、その運営方針を打ち出すことが期待されていると言えます。



ワークショップ終了後、参加者全員での記念撮影



AMDA スタッフ オフィス前にて



KOSHU 有料トイレの正面に描かれた絵

今年度は、ジョージ地区に職業訓練センターを建設する予定があります。今まで継続してきた洋裁教室や識字教育に加えて、住民が貧困から抜け出せることができるようなプログラムが実施されると思います。また、これによりマイクロクレジット利用者も増加すると予測できます。今まで大切にそして地道に実施してきたことが、住民と共に大きく花開こうとしている時期になるのでしょうか。5月頃からは、青年海外協力隊の農村開発専門の方がAMDA ザンビアで活動すると聞いています。

JICAの実施するPHCプロジェクト終了後も、AMDA ザンビアは現地に残り支援を続けるでしょう。AMDA ザンビアではジョージ地区出身者が活動しています。ですから、自分たちの問題として取り組むことができているのだと思うのです。スタッフの熱意とプロフェッショナルな仕事ぶりには本当に頭が下がりました。昼食で一緒に主食のシマを食べながら熱く語ってくれたことは忘れられません。しかし私が、再訪することはあまり歓迎されていないようで「日本人は仕事のしすぎだ」と言われてしまいました (笑)。

今後のますますの発展と成長を期待しています。

数年前には停滞していた住民組織の活動が、1年程前から様々な住民組織やNGOを巻き込む形で活発になり形としてやっと見えるようになってきたようです。人材が育つことを根気よく待たなくてはならないプライマリー・ヘルスケア (PHC) の性質上、地域住民の人材が成長し組織が形を整えるまでには長い時間がかかります。今、住民組織のリーダーがようやく育ち始めた段階で、このような地域に根ざしたPHCプロジェクトを期間だからと終了してしまうことは非常に残念なことだと思います。是非、プロジェクトの延長、あるいは第2フェーズへの速やかな移行を望みます。

最後に、今回NGO等連携強化費事業にて現地へ調査派遣くださったJICAとAMDA関係者の方々に深くお礼申し上げます。また、現地の住民組織やNGOで活動する皆様の暖かい心に感謝いたします。そして、PHCプロジェクトで活躍されている専門家の皆様には本当にお世話になり励ましていただきました。心からお礼申し上げます。

ケニアでの活動を振り返って

林 信秀

1997年11月から国連ボランティアとして、ケニアの首都ナイロビにあるAMDAのアフリカ地域事務所にて活動を行い、今年2月をもって任期終了に伴い帰国しました。この間の活動を振り返りご報告したいと思います。

AMDAナイロビ地域事務所は、アフリカ諸国におけるAMDAの活動のAdministration及びLogisticサポートを行う事務所として1995年に設立されました。ナイロビは東アフリカ随一の大都市で、物資の流通や国際線の頻繁な乗り入れなどさまざまな面で東アフリカの入り口としての役割を果たしています。AMDAのみならず多くの欧米系の国際NGOはナイロビに事務所を持ち、ここを拠点として近隣諸国での活動を実施しています。事務所設立以来、AMDAのルワンダ難民支援プロジェクトを実施するための中継点として、派遣スタッフの受け入れや難民キャンプへのフライトの確保、プロジェクト物資購入、情報伝達などプロジェクト実施に欠かせない業務を行ってきました。

1997年度より、ケニア国内における長期プロジェクトとして、AMDAが提唱する「健康と貧困の問題」に包括的にアプローチするABCコンセプトに基づくプロジェクトが開始されました。ケニアのみならず開発途上国においては、医療や健康の問題というのは単独に存在するものではありません。保健施設や医療施設、医療スタッフの絶対的な不足というのは大きな問題ですが、そういった施設の設置、また医療提供のシステムを構築するだけでは、問題が解決の方向に向かわないという現状があります。診察を受ける患者や保健衛生状態改善を主体的に行う地域住民が貧困に苦しんでいるために、保健医療システムにアクセスできなかったり、また生活の中で衛生環境を改善する活動ができなかったりするからです。医療施設にアクセスできないというのはお金がないから診察や投

薬を受けられないというだけでなく、医療施設が患者さんから診察料金を徴収できないため運営経費を確保できず、結果として医療スタッフを常駐させることができない、または医薬品を常備できないという悪循環を起こすことになります。ケニアの保健省は、できるだけ廉価に医療を提供できるようにInitiativeを取っており、初診を40ケニアシリング(70円程度)に設定していますが、それでも診察料を払えない人は多く、またケニア政府の財政も十分ではないため、病院や診療所の運営は資金面で完全にショートしています。こういった現状に対し、中長期的



な改善に向け住民の経済的な自立すなわち貧困対策といったものが不可欠となります。ABCコンセプトはここに焦点を置き、職業訓練を行い、マイクロクレジットを実施することにより、住民の経済的な能力を高めてもらうというものです。AMDAはナイロビ市内にあるキベラスラム地区に住む女性を対象としてプロジェクトを実施しました。これまで約120名の女性がトレーニングを終了し、内40名強がマイクロクレジットの対象となり、小規模のビジネスを行っています。

地域事務所の重要な課題としてアフリカにあるAMDA事務所と日本の本部の間における情報伝達の円滑化という点があげられています。近年のインターネットの普及を受け通信のスピードが格段と速くなったことにより、日本とアフリカという地理的な距離によるコミュニケーションの不便さは軽減されましたが、レポートや事務業務上

のより確立したシステムが今後必要になると思います。

3年に及ぶ活動の中で、ひとつ達成できなかったことはケニアでのAMDA支部の設立です。AMDAは多国籍のNGOとして世界で活動しておりプロジェクト実施の為、日本だけでなく、ネパールやバングラデッシュ、フィリピンからも医師、看護婦、調整員が派遣されています。その基盤になるのが各国に設立されているAMDA支部です。現在アフリカではスーダン、ザンビア、ルワンダ、ウガンダの4カ国に支部があり、現地スタッフが活動しています。

1997年のソマリア洪水緊急救援時にはAMDAウガンダ事務所からウガンダ人医師が、2000年のモザンビーク洪水緊急救援時にはAMDAザンビア支部からの医師がAMDAの緊急救援活動に参加し、被災者の診療活動にあたりました。

アフリカは援助を受けるだけの大陸ではなく、自国内の問題だけにとらわれずにグローバルに相互扶助を実施する基盤が既にあると私は考えています。今後AMDAのネットワークの基盤となる支部がアフリカ各国に設立され、緊急救援プロジェクトだけでなく長期開発型のプロジェクトも含め、AMDAアフリカのメンバーが世界中で活躍する時代がくることを期待しています。

最後になりますが、AMDA本部事務局での勤務を含め5年にわたりAMDAのプロジェクトに携わってきました。この間、多くのAMDA支援者、支援団体そしてボランティアの方々のご協力やご助言を得て、どうか業務を遂行してまいりました。心中より感謝申し上げます。また、今後もますます大きくなるニーズに応えるべく活動を展開するAMDA本部職員、プロジェクト派遣者とAMDA支部メンバーの皆様の更なるご活躍を心より祈念しております。

アンゴラ国内避難民救援活動

アンゴラ事務所 ファイナンス・オフィサー 田中一弘
(2001年3月5日)

私たちがアンゴラに入って、早、半年以上が経過しました。プロジェクトの立ち上げという第一段階から、プロジェクトを軌道に乗せるという第二段階までを無事に終了し、この活動を効果的に発展させていくという次の段階に入ったといったところでしょうか。

このプロジェクトは、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) の実施パートナーとして、北部ザイーレ州の州都ムバンザ・コンゴにて、州立病院を再建するというものです。具体的には、AMDA の医師による診察、現地病院スタッフのトレーニング、医薬品・医療器具の供与、水・衛生プログラム、栄養プログラム、予防接種プログラムなどを実施しております。病院の建物自体の修復など、ハード面は政府が担当し、AMDA はソフト面の強化を担当するという形をとっているといえます。

これまで、オフィスの設立、政府機関および国際機関との交渉、移動・輸送手段の確保など、苦勞することも多々ありましたが、この短期間で大変大きな結果が得られたことをご報告したいと思います。また、ザイーレ州知事ならびに保健省からいただきました感謝状もあわせてごらんいただければと思います。

昨年8月末から現在までの6ヶ月間は、あっという間に過ぎてしまったようで、しかし、もっと長い間滞在しているような不思議な感じがします。アンゴラという国で、まったく何もないところからプロジェクトを立ち上げるには、様々な事を同時に考え行動するという事を要求されました。これは、どの国のプロジェクトにも当てはまると思いますが、日本では本当になんでもない仕事がとても骨の折れるものになることが、しばしばあります。もちろん、常にそういうことを頭に置いて活動しているわけですが、スムーズに進まないことが重なりますと、想像以上の忍耐が必要となってきます。

ただ、そういう環境だからこそ、やりがいも感じられるのも事実です。す



感謝の言葉

ジョセ・ペドロ・オーガスト (Jose Pedro Augusto) 医師
ザイーレ州政府保健省長官

ザイーレ州政府・保健省の責任者として AMDA 日本代表へ心から感謝の気持ちをお伝えいたします。

この機会をおかりして、貴団体のスタッフが短期間にムバンザ・コンゴ州立病院において医師、薬品、医療器具、家具、看護婦のための技術指導、予防摂取、栄養障害をもつ子供への栄養支援等の提供をして下さり深く感動しております。このプロジェクトは当病院スタッフの向上意識を高める源となり、私はこの感謝の気持ちをどう表現すればいいのか、ふさわしい言葉さえ見つける事ができません。

他の NGO やローカルパートナーと比較するつもりは少しもありませんが、AMDA は賞賛されるべき社会的な団体であり、当地の住民と協力して活動しています。AMDA は本当の意味で活躍している NGO です。AMDA は州立病院で長い間失われていた医療に関する明確な指標を取り戻すために貢献してくださっています。ありがとうございます。

(翻訳 藤井倭文子)

べてが新しいことばかりなので、とても刺激があります。このプロジェクトを支援してくださっている皆様の期待に応えようとする責任感が、日々の活動を充実したものにしてくれます。こうしたことすべてが、これまでの時間を短かったようでかつ長かったように感じさせるのではないかと思います。

これからも、このプロジェクトをより一層効果的なものにし、ムバンザコンゴの州立病院の復旧と住民の健康の向上に貢献できるよう、がんばりたいと思います。今後とも、アンゴラ・プロジェクトに皆様のご理解とご協力いただければ幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

バングラデシュ研修

医師 寺村 知子

今までにボランティアといえるような事はした事がないにもかかわらず、今回、縁があってバングラデシュに行く機会を与えていただいた。

とはいっても、バングラデシュに関する私の知識は限りなく乏しく、本屋でガイドブックを探しても見つからず、インターネットでなんとか情報を集め、バングラデシュに出発した。

結構一人旅には慣れているつもりであったが、タイからダッカに向かう飛行機の中で、バングラデシュの人ってどんな人だろう？空港から宿泊先までうまく行けるかな？と様々な不安がよぎった。

空港に着くとそこは真夏で、とにかく蒸し暑く、ハエがいたるところにいる。おまけに周りの人が話している言葉は、ベンガル語らしくさっぱりわからない。入国審査では長時間待たされたあげく、visaも持っていないのに入国が許可されてしまった。(結局 visa を取りに再度空港に行くことになった) 迎いのロビーもものすごい人だかりで、言葉は悪いが人というよりも物を見ているような気分であった。人だかりにも圧倒されたが、リキシャ、バイクリキシャにも驚き、またその数が多いのに驚いた。正直見るものすべてが、初めてみるものばかりで、一瞬言葉を失った。

空港に通じる道は、さすがに舗装されていたが、banani 地区(私はこの地区に宿泊した)のほとんどは、土の道路であった。土の道路に車が入るので土埃がひどく、またこのバイクは、ものすごい排気ガスを出すので、外に出ると喉と目が痛く、会話などとてもできない状況であった。こんな所でも人が生きているのが不思議に思えた。

翌日さっそく Free Friday Clinic に行った。

もう何を見ても驚かないだろうと思っていたが、スラム街の衛生状態の悪さと悪臭にまたまた言葉を失ってしまった。日本人が珍しいのか私の周りに子どもたちが群がってくる。私も珍しいので、写真を撮ろうとすると子どもたちはなんとカメラ目線で笑ってくれる。裸の子ども、裸足の子ども、埃まみれの子ども、日本では見たことのないような子どもたちだったけど、表情は明るく、土の道路で、思いっきり走り回り遊んでいたのが少々うらやましくも思えた。

Free Friday clinic には、私が小児



科医である事を考慮してくれたのか、子どもが半数以上来ていた。呼吸器疾患と消化器疾患、皮膚疾患がほとんどだった。ほとんどの病気が生活環境、衛生状態の悪さが原因と思われた。

その中でも、私の脳裏に焼き付いて離れない患者がいた。彼は典型的な先天性両内反足であった。ここの人は、年齢を言う習慣がないらしく明らかな月齢は不明であるが、1歳くらいにみえた。母親は消化器症状のみを訴えていたが、私には足の方が気になった。Free Friday clinic では、先天性内反足は治療できない。というよりも、この国には、整形外科医が不足しているので、このでの疾患は治せないようである。保健所勤務の小児科医の私とし

ては、納得できない。Free Friday Clinic は確かに必要ではあるが、そのあり方についてはさらに検討が必要だと思った。どこの国でもそうだが、貧困のしわ寄せは子どもに影響を及ぼす、しかし次の世代を支えるのは紛れもなく子どもたちなのだから、子どもたちが生きていく上で必要な健康は守らなければならないと思った。

その後3日間は、dahka から 30km 程離れた gazaria に行った。

ABCproject の週に1回の集金に同行させていただいた。お金を借りているのは、すべて女性である。

私はここの女性が好きだ、現実から逃避せず何とか自分自身の方で生活を向上させようとしている前向きな姿勢が感じられる。村人達の生活が少しでもよくなる事を願わずにはいられなかった。

私の目的は、この地域の健康調査であるが、職業柄、どうしても興味の対象は子どもと母親になる。私は、主に家族構成と年齢について聞き、なるべく

多くの子どもたちを視診し、可能であれば触診もした。

ここでたいへん驚いた事があった。それは、家族計画教育が徹底されている事である。20代と思われる若い夫婦は、たいいてい子どもは2人であり、未婚の女性や男性に「子どもは何人欲しいのか」と聞くとすべての人が2人までだと答えた。

実際、tenger chor では、若い夫婦の子どもは2人または1人で、多くが初産は20歳前後で若年出産はいなかった。また、子どもの年齢は2-3歳離れている兄弟が多かった。

家族計画、母体保護に関する知識とその実践は Perfect に近いと思った。

健康面では、学童期の子どもには、

皮膚疾患が多く生活環境、生活習慣によるものである事は容易に推測された。深刻であったのが乳児（0～1歳）である。特に首が据わったくらいの乳児たちは、多くが呼吸器症状と長期間続く発熱があり治療が必要であったが、お金がないから病院に行けないとどの母親も訴えていた。私も、何もできず、熱が出たら少量の水を何度も飲ませるように、咳のひどい時は背中をさすってやれとか子どもだましのような事しか言えなかった。教育も大切であるが薬がないと人の命を救えない事を実感した。

さらに、私の興味は人々の生活、特に育児へと広がった。

この国の育児は、至ってsimpleである。

母は愛情深く子どもを育てるが、お金がないので粉ミルクなど買うお金もないほとんどの母親が母乳で育て、どうしても母乳が足りない親子は、もらい乳をしたり山羊のミルクに砂糖を添加して子どもに飲ませるらしい。母親は4～5ヶ月まで母乳主体で育て、それ以降は離乳食に切り替えるらしいが、この時期より体重増加不良になったり、体調を崩す子どもが増えるらしい。親離れ子離れも早い。3歳をすぎた子どもは、親がいなくても怖がる事もなく、年長児に混じって遊んでいる。年長児もまた子どもの扱いがうまい。

イスラム教の影響を強く受けている国ということもあってか、地面に近いところで生活をしているため、母は常に子どもの目線で子どもを観察し、語り掛けているように見えた。

炊事洗濯は、当然のことながら女の仕事なので、母はとても忙しい。子どもはいつもよく働いている母の姿を見ることができる。それがどの程度子どもに影響を及ぼしているかはわからないが、日本の子どもに比べると自立している子どもが多いように感じられた。

当然のことながら、ひきこもり現象など陰気な風潮はここには無縁であるように感じられた。親は、子どもに教育を希望し、将来は何らかの職業に就く事を願っている。子どもたちには、漠然としているが将来の自己イメージ、自己目標があるように感じられ



た。そして働かないと食べていけないことを、身をもって経験しているので、少々事ではあきらめたりしない捨て身の強さを持っている反面、給料のいい職業が見つかると思わずに転職してしまう潔さを持っているため職人気質の人は少ないようである。

バングラデシュの人たちは、私たちの国は、貧しくてたくさん抱えていると誰もが言っていたが、だからそれにたいしてどう対応しようとしているのか、どのように生活を向上させていきたいのか、国がどのように発展する事を望んでいるのか、その方向性が残念ながら、私には伝わってこなかった。

逆に私からすると、バングラデシュの人たちは、物やお金をもらう事になれてしまっている、いわゆる貧乏なれしてしまっているようにも感じられた。また、そんな彼らを見ていると、私自身もお金がある生活に慣れてしまっ

て、自分の生活、自分の仕事、日本の将来についてどれだけ真剣に考えていたのだろうかと思いが身を反省せずにはいられなかった。

現在のバングラデシュは、50年前の日本に匹敵しており、ここで生活した9日間で私の両親や祖父母の世代が生き抜いてきた時代をかなり身近に知ることができたことをうれしく思う。今、日本は豊かになったけど確かにこういう時代があったんだという事実を忘れてはいけないし、今後日本人として発展途上国に私ができることについて考えていきたいと思う。

今回、このような貴重な経験をさせていただいた AMDA 事務局伴場さん、およびバングラデシュ滞在中に大変お世話になった AMDA バングラデシュの Mr.Razzac をはじめとする皆様様に心から深謝する。

ありがとうございました。

■ AMDA ABCプロジェクト

AMDA では活動開始以来、開発途上国において保健医療活動を主に実施してきたが、1997年から地域環境開発の一事業としてマイクロクレジット（小規模融資）を柱としたABCプロジェクト(AMDA Bank Complex)を開始した。ABCプロジェクトは、AMDAが均衡のとれた地域開発を実施するために、マイクロクレジットに保健衛生プログラム、職業訓練プログラム、教育プログラムを加えた総合的的事业である。

■ バングラデシュ・ガザリヤ郡でのマイクロクレジット

世界の最貧国といわれるバングラデシュでは国民の1人当たりの1日の生活費が1ドル以下と言われている。ダッカからバスで2時間ほどの所にあるガザリヤも住民の大半が農業または河川漁業に従事している貧しい村である。

このガザリヤにおけるマイクロクレジットの一例を示すと、AMDAは一定金額（5,000TK：約10,000円）を融資し、住民は個人の貯えと合わせて雌牛1頭14,000円を購入する、毎日牛乳を売るとその平均月収は約3,000円、これを1年続ければ十分に借入金を返済したうえで、収入を増やし、生活そのものを改善、向上させることが可能となる。

ミャンマーインターン報告

大学生インターン 山本知恵子

私は2月18日から1ヶ月間、AMDA ミャンマーでインターンを経験しました。多くの面で日本と異なった環境で過ごし、戸惑いもありましたが、ミャンマーに行ったことは本当に自分にとってプラスになったと思っています。1ヶ月の活動のうち、1週間ほどは新プロジェクト（ニャンウー、パコックタウンシップでの巡回診療と栄養給食）のための調査、交渉に同行し、3週間ほどはメッティーラでの巡回診療、栄養教育と給食、マイクロクレジット（小規模融資）、オフィスでの診療を視察しました。

インターンとして現地で活動する長所は、なんといっても現地で温かく迎えてくれる人がいて、現地でのAMDA活動を自分の目で見られることです。空港で迎えられたとき、たわいもない話をしていたとき、悩みを抱えていたとき、活動について説明を受けているとき、体調を崩したとき、見送ってもらったとき…、振り返ると周りの人に毎日支えられていました。AMDA ミャンマーでの活動地であり、現地派遣者の滞在地となるメッティーラでは、プロジェクトマネージャー、医師、看護婦、通訳、プロジェクトアシスタント、家政婦、ドライバーと川口看護婦、橋本看護婦が活動を行っています（2001年3月現在）。ここで、簡単に彼らの業務などを紹介します。

午前中は医師、看護婦、プロジェクトアシスタント2人、ドライバーが巡回診療チームとして無医村へ診察に出かけ、川口、橋本両看護婦と通訳は終日メッティーラ子ども病棟で業務を行います。そして巡回診療チームはすべての患者を診察した後、オフィスに戻り、オフィスにやってくる患者を診察します。すべての患者を診察し終え、薬の整理や片づけを済ませ、午後5時ごろスタッフはオフィスを後にします。

マイクロクレジット（小規模融資）では週2回、プロジェクトアシスタント1人、医師とドライバーがチームを組み、返済のチェックと保健衛生教育を行います。この他にも、スタッフ個人が担当プロジェクトに関する調査やレポート作成をします。家政婦と夜警は、朝早くから夜遅くまで現地派遣者を気遣ってくれました。週1回水曜日には、スタッフ全員で勤務後にミーティングを行い、1人1人が意見を言うことができ活発に意見を交換します。現地派遣者も、通訳の助



毎週水曜日に行われるスタッフミーティング

けを借りて、議論に加わることができます。私もミーティングでは必ず意見を言うように心がけました。ミーティングではスタッフのみんながさかんにメモを取り、内容はファイルにして残します。

勤務外でも、日本語を話せる人は近所の人達に日本語を教えたり、医師は自宅にいく患者を診察します。スタッフの中には現役大学生もおり、平日はAMDAで仕事をこなし、土日は大学で勉強に励んでいました。私もメッティーラ滞在中に現地の大学生達と話す機会があったのですが、彼らは日本にとっても興味をもち、中には日本語をかなり話せる人もいました。僧院学校でも大学生のボランティアが英語教育を行っており、今後は彼ら大学生がAMDA ミャンマー

の活動の担い手になっていくことが十分に期待できます。

次に、私がAMDA ミャンマーの活動を視察して印象に残ったこと挙げます。

<新プロジェクトについて>

今回新しくプロジェクトを始めるにあたっての市役所や病院との交渉や巡回診療を行う村の選択、情報収集、新しい事務所となる建物の選択に同行しました。市役所や病院、村にある保健所を訪問し、地道に交渉を続けるプロジェクトマネージャー、駐在代表を見て、AMDA ミャンマーの活動は人と人との関係が基礎になっていて、「援助する側にもプライドがある」ことを肌で感じました。そして、カルテを快く公開する現地医師、貴重な地図を提供してくれた市役所の人々、情報交換を行う現地NGOとの協力は、AMDA ミャンマーの活動が高く評価されている証だと思えます。病院から集めるカルテも各村の

助産婦さんがもっていて、膨大なデータはすべて手書き、手作りのものです。情報の整理が行き届いていない環境で、現地調査の重要性、困難さを目の当たりにしました。

<巡回診療について>

今でも、診察を終えてうれしそうに帰っていく患者の姿が目には焼き付いています。村人達は、受身ではなく積極的にAMDAの活動を支援し、手伝っていました。巡回診療では、様々な日本との違いに驚かされました。ある日、1人の僧が電線から落ちて、頭に深い傷を負って現れました。すぐにAMDAの医師が手術を行ったのですが、麻酔をすると治りにくくなるので短い手術では麻酔をしないというミャンマーの考え方から、麻酔なしの手術

になりました。僧はずっとうめき声をあげながら痛みに耐え、その声を聞きつけた多くの村人達が心配そうに手術を見守っていました。

また、ある村では流産をした女性が急に運ばれてきました。急いで病院に運ぶ必要があったため、AMDAの車でメッティーラ病院まで運びました。その途中で、いきなり車が止まりました。訳を尋ねると、「お昼ご飯を買いに行きました」とのことでした。急患を運ぶ途中なのに、信じられませんでした。メッティーラ病院に着くと、すぐに産婦人科医が現れ、処置を始めました。ほっとしていると、「たまたま腕のいいお医者さんがあいていて良かった。」という一言。電話のない環境の不便さを改めて感じました。



巡回診療で薬を渡すプロジェクトアシスタント

<栄養教育、給食について>

「村の人々が自分で、自分の健康を継続的に守ることが目的です」とAMDAの医師は言いました。栄養教育を受け、村のボランティアが作る給食を一日2食週3回食べる親子には、契約を守る義務があります。契約は、「一日3食食べる、欠席しない、バランスの良い食事をとる、ご飯やトイレのときは手洗いをし、沸かした水を飲ませる、爪を切る、酒を飲まない、煙草を吸わない…」などです。栄養教育

を終えた親子がきそって瓶の水を汲んで石鹸で手を洗う姿が印象的でした。

<終わりに>

今回の滞在では、実際に自分の目でAMDA ミャンマーの活動を見ることができ、活動の改善点や今後の自分にとって大切な要素を模索しました。浮かび上がるのは、日本の考え方とミャンマーの考え方の食い違い、相手に自立を促す援助の難しさ、交通事情や通信事情の悪さ、ごみ処理問題、同じ国民でありながら生じるあまりにも大き

い機会の不平等、コミュニケーションの難しさと大切さと面白さ、出会った人に対する感謝の気持ちなど、、、短期間ではありましたが、フィールド経験ができたことは私の大きな財産です。しかし、この経験はこれからの私にとってはひとつのきっかけに過ぎません。今後もこの経験を多くの人に伝え、現地の人達との交流、ミャンマーについての知識を深めて、この経験がこれからの自分にどう生きるのか、どうミャンマーと関わっていきけるのかを考えていきたいと思います。

AMDA スタッフ募集

- | | |
|---------|--|
| 1. ポスト | AMDA International
コミュニティサービス局 海外事業担当スタッフ、海外派遣スタッフ |
| 2. 募集人員 | 若干名 |
| 3. 勤務地 | AMDA International 本部 岡山県岡山市 |
| 4. 期間 | 2001年4月以降 |
| 5. 勤務内容 | 海外プロジェクトの管理運営(現地事務所との連絡及び国内支援者との連絡業務、事業予算獲得・管理及び報告業務、海外出張有、新事業の発掘及びプランニング、派遣者研修、担当プロジェクト広報業務) |
| 6. 条件 | AMDAの理念を理解し、緊急援助及び開発援助等国际協力に理解と情熱のある方
英語での業務遂行が可能な方(英検1級・TOEFL600点程度)
基本的なコンピュータ操作(表計算ソフト、ワープロソフト、電子メール)ができる方
社会経験のある方(3年以上が望ましい) |
| 7. 待遇 | AMDAの就業規則に準じる(社会保険完備)。
月曜から金曜日勤務(週休2日)、5週間から6週間に1回土曜日勤務有り。 |

連絡先 〒701-1202 岡山県岡山市橋津310-1 AMDA International コミュニティ・サービス局
※採用係宛 志望動機、履歴書とも英文・日本語各1通を上記住所に郵送してください。

AMDA ミャンマープロジェクト

2001 春 フィールド体験スタディーツアーアンケート

2001年3月11日から17日までAMDA ミャンマースタディーツアーを行いました。今後スタディーツアーをより一層充実させるために、参加者の皆さんにアンケートのご協力をいただきました。

* AMDA スタディーツアー / ミャンマーを選ばれた理由

A とりあえず、NGO主催のスタディーツアーなら金額が許すかぎり（アジア内）どこでもよかった。

AMDAのツアーをみつけて、活動も見れて、程よく観光もできそうなプランだったので選んだ。

B 以前から国際協力活動に興味を持っていましたが、関連した知識は全くないという状態でした。そんな時にちょうどこの企画を見つけ、時期もちょうど良く、ミャンマーという今まであまりなじみのなかった国ということで、決めました。また、この体験が少しでもきっかけになれば…と思い、「このチャンスを逃してはいけない！」と思いました。

C AMDAに関わっていて興味のある国の1つだったこと。カンボジアばかりにこだわっていたので、もっと他のアジアの国々にも目を向けたいと思ったから。何回かミャンマーのプロジェクトの報告会に参加していて、自分の目で見てみたいなど心のすみで少し思ったことがあったから。

D 数年前にNGOに興味を持ち、パキスタンのあるNGOを見学し、看護婦としてまだ未熟だった為、あまりのギャップの大きさと言葉の問題であきらめていました。しかし、ちょうど看護婦の仕事への興味の限界を感じていたところでAMDAの活動に興味を持ち、実際の活動を見たく参加しました。ミャンマーを選んだのは、子どもが好きで、小児救急もやっていたため子ども病院のあることから決めました。

E 日程的に都合が良かった。／保健衛生系のスタディーツアーに参加したかった。／NGOで働きたいので、まず現場を見てみたかった。

F 日程が合ったから。／実際行われている保健医療プロジェクトを見てみたかったから。／看護婦（日本人も含め）の役割、仕事内容を知りたかったから。

G アジア諸国の中で、ミャンマーには行った事がなかったから。／観光では見れないミャンマーを見たかったから。／本部ボランティアとしてミャンマーに関わるうち、「現場（field）」を見たいという思いが強まったから。

* ツアー実施期間、また各訪問場所を含む時間配分について
A 各訪問場所でも時間配分はちょうどよかったと思う。ツアー期間については、同じ金額で、高価なホテル・食事で1週間よりは、普通（又は安ホテル）でももう少し長く、ゆっくりと色々な体験を試してみたかった。

B 1つ1つ十分な時間を与えてくださって、それぞれの活動や様子をじっくり観察し、いろいろな事を考えることができたと思います。期間としては、もっと長くいたい！という思いはあります。なかなか体験できないことなので、一日だけでなく、またもう一度別の日に訪問するというのもまた違った面を発見できるのではないかと思います。

C プロジェクトを見る時間がもっとほしかった。短時間だったので、後から思い出すといろいろとまざってしまった感じがする。

D この短期間にミャンマーをあますところなく伝えたいというスタッフの方々の強い思いをひしひしと感じました。スタディーツアープログラム、観光共に短時間しか取れないのは仕方ないと思います。ツアーというものが初めてだったため、一日の予定を（後半数日のように）教えていただけるとありがたいです。

E 観光はもう少し少なくて良かった。その代

わりにスタディーツアーのプログラムをもっと長くして欲しかった。

先にヤンゴンの事務所を訪問したかった。スタディーツアーを楽しみにしていたのに、最初のイベントが観光というのは少しがっかりしてしまう。（気合が抜ける）

F 1週間という期間は丁度いいが、スケジュールはきつかった。ときどきスケジュール以外の訪問が入り、つらかった。子ども病院、AMDAクリニックでの診療をもっと見たかった。

G ツアーの主旨を考えると仕方ないとは思いますが、少しハードスケジュールだったかなあ？！あと1日か2日あれば…と思いました。

観光の時間を削ってでも、もう少しメッティーラでプロジェクトをゆっくりと見たかったです。

* ツアー内容（プロジェクト活動・観光内容など）について

A 皆さんが詳しく丁寧に説明してくださって、とてもわかりやすかった。できれば、ツアー初日にも、1日1日の日程表などをくださると、AMDAのプロジェクトについても、観光についても少しは考慮して行動できたかもし



マンダレー旧王朝前にて（スタディーツアー2日目）最後の王朝があった町。現在ミャンマー第2の都市。マンダレーヒル頂上からの全景には一同息をのんだ

れない。

B 皆さんそれぞれ詳しく説明してくださり、また、どんな質問にも適確にわかりやすく答えてくださったので、とても感謝しています。普段は触れたり考えたりすることが難しいミャンマーの状況などをしっかり見つめることができましたと思います。

C 医療に関係していない人でもわかるような説明をして欲しいところもあった。薬とか医療器具とか名前だけでは良く分からないこともあります。(私の勉強不足なのかもしれませんが)あと、バスの中で

ちょっとした説明をして欲しかった。始め、巡回診療の見学に行く前に説明されかけて時間がなくてやめてしまったけれど、そこでやめずに次のプロジェクトを見学に行く前に説明してほしいです。

D 個人的には上記の理由から子ども病院と一般の病院の両方の比較、AMDAが介入しどう変化があるのか等みたいとも思いますが、医療従事者以外の方も多くいらっしゃるため無理かと思いましたが、現地の看護婦さん、ガイドのソーさん、滞在経験のある前さん、駐在の小林さんの説明があり、実際見なくとも現地の事情というのを教えていただき、大変参考になりました。

E 判りやすかったが、実際にその場所に到着する前に、バスの中で簡単な説明をして欲しかった。(背景や何を視察するための訪問かetc.)次にどこに行くかが分かりにくい場合も。

色々なプロジェクトを見るのが出来て楽しかったです。

F 移動の際、次の訪問先を知らせてくれないことがあり、現地で説明を受けるものの、何を重点的に見たら良いのか分からないことがあった。

G 前さん、小林さんによるプロジェクトの説明、ガイドのソーさんによるミャンマーの説明はわかり易く、質問にも丁寧に答えてください、大変感謝しています。

プロジェクトに関わる現地スタッフからの発言がもっと欲しかったです。(工作中に申し訳ないのですが、自分が何をしているか具体的に、難しい点ややりがいのある点)

私はボランティアをしているのでAMDAについてある程度知っていますが、他の参加者に、前さんや小林さんの仕事の具体像が分かりにくかったのでは…?!

***料金、フライト(タイ航空、エアーマンダレー)などの移動について**

A 料金・移動については、あまりミャンマーに関する知識もないので、今回のツアーで最高に良かったと思っています。

B 満足しています。ずっとバスやトラックで移動したことも、ミャンマーの町並みや風景なども実感できるので、



メッティーラ市内の小・中学校を訪問(スタディツアー4日目)
ミャンマー語、英語、歴史、算数、音楽などから好きな教科や将来の夢を質問。はみかみながらもしっかりとした口調で答えてくれました。最後は元気いっぱい「さようなら」と手を振ってくれました。

私は良かったと思います。

C バスでの移動が多かったのは、貴重な睡眠時間に使えました。

D 快適でした。でも食事の量は全体的にもっと少なくなくて良かったです。もったいない!

料金に関しては自分の参加費用の一部でもAMDAプロジェクトに使われるようにして欲しかったです。(実際はそうなっているのかもしれませんが、伝わってこない)。もしもこれで少しでも赤字になっているとすれば、悲しすぎる…

E 申し分ない

F フライトはとてもよかったです

旅行代金については、ホテル、レストランランクを少し落として、もう少し安くするのはどうでしょうか?あまりにも、いいホテル・レストランだったので、少し心苦しかったです。

***場所(ミャンマー、メッティーラ、活動地、観光先、宿泊施設など)について**

A どこに行ってもものんびりしていて(日本よりは)いいところだった。私の想像とは少し違った途上国(?)ミャンマーを味わえたと思う。このツアーでしか知ることのできないメッティーラでのAMDAの活動や、バガンで見た朝日、遺跡の説明など、内容は濃かった。毎日泊まる宿にはおどろかさされ、本当にいいのか?と尻ごみしてしまった。

B とても私たち参加者を気づかって下さり、心から感謝しています。おかげでとても楽しんで過ごすことができたのではと思います。

C 観光が日程表で見えるかぎり、少ないのだろうと思っていたのですが、予想以上に多くのものを見ることができました。

D ミャンマーには興味はあってもなかなか個人で来ることはできなかった。また、もし来たとしても、いわゆる観光地にくるだけで終わると思うので、メッティーラのようなマイナーな所に行けた事はたいへん貴重な経験でした。宿泊先は自分の旅行でもおそらく泊まれないであろう、食べられないであろう豪華な所に驚いてしまいました。中で



ミャンマー子ども病院前にて(スタディツアー3日目)
 メッティーラでは巡回診療先のマジス村、マイクロクレジット(小規模融資)先のゴン村視察。
 市内の市場を見学し、民族衣装のロンジーなどを購入

もエーヤホテルは最高でした。

E 宿泊施設が高級なのが気になりましたが、小林さんの説明で納得しました。メッティーラ ハニーホテルは結構好きでした。

F 個人では絶対訪れることの出来ないだろう村々を訪問でき、良かった。地方都市、その周辺の村々をバスで移動することにより、彼らの生活がより身近にふれることができよかった。

G 何かの本に書いてありましたが、”ミャンマーは本で読み知ると行ってみるのでは全く違う…”と。まさにその通りでした。ミャンマーに対する印象がくつがえされた様に思います。

*** その他、率直な感想、良かった点、問題/改善点、取り入れて/除いて欲しいことなど**

A 何も知らずミャンマーに来て、資料で見えてきたAMDAの活動をようやく飲み込めたように思う。それから、ミャンメロ(本部注:ミャンマーに惚れ込むこと)になる理由もとても理解できた。良かった点も悪かった点も上記のようなことだと思う。付け加えるなら、何のプロジェクトにしても、その対象となる人達がいったいどのような生活をしているのか、というところをもう少し詳しく知りたかった。色々な所に行って、見て、聞いて、話して、考えることができたのは、どの場においてもAMDAという団体の現地の人からの熱い信頼があったからこそだと思います。スタッフ等の方々にはとてもとても感謝しています。どうもありがとうございました。

B 今回は本当にお世話になりました!非常に貴重な体験をさせていただいたと思います。今まで持っていたミャンマーのイメージが実際に訪れることでガラッと変わりましたし、様々な知識も得られ良い勉強になりました。AMDAスタッフの皆様や現地の方々、そして参加者の皆様と素敵な出会いができ、私にとって今回のツアーは宝物の1つになったと思います。まだまだ勉強しなければならないことは限りなくありますし、このような国際協力に携わるため

に必要な知識ありません。でも、このツアーをきっかけとして、他の様々な国と団体の活動に目を向け、少しずつですが役にたてるように頑張っていきたいと思います。前さん、小林さん、ソーさん、そしてAMDAのスタッフの皆さん、本当にありがとうございました。これからもご活躍を期待しています。そして、何かお役に立てることがあれば、ぜひ参加させてください!これからもよろしくお願いたします!

C 観光に使う時間がプロジェクト見学に使う時間よりも多かったように思う。プロジェクト見学の時間をもっと多ければゆっくりとみれたのではないのでしょうか。1週間ですべての人に出会えてツアーに参加した人とも仲良くなれてすごく楽しい旅行でした。前さん

んや現地でいろいろと企画してくださった方々に感謝しています。ありがとうございました。

D 初日、ヤンゴン空港での荷物の件にはおどろきましたが、NGOの活動の苦勞を見せていただき、たいへん貴重な経験でした。今回、正直な所、休みが取れると思っていた為、急な申し込み、振込みの遅れ等で前さんには直前で多忙なところを手間取らせて申し訳ありませんでした。貴重な経験ができたことに本当に感謝します。

E 個人的な意見ですが、

1. スタディーツアーに参加するのは自分も何かしたいという気持ちがあるからだと思います。単純な視察だけではなく、少しでもAMDAの活動に貢献していると思えるようなイベントがあると嬉しかったです。例えば、ヤンゴンまで運んだ荷物がその後どうなったかが判る…とか、学校を訪問するときには衛生関係の紙芝居をやっておける…etc. 今回のように視察のみだと授業や診察の邪魔をして終わっているようで、勉強したり、治療してもらえる時間を取ってしまっているようで申し訳なく思いました。少しでも何かお返しをしたかったです。病院の掃除をやったり、給食を一緒に作るとか配るとかあってもよかったのでは?
2. グループをいくつかに分けて、半日でもAMDAのスタッフと一緒に行動する等の時間が欲しかったです。実際のDr.の診察している所をもう少し見てみたかった。
3. ヤンゴンでの輸入のときに「よくあること」と言われていましたが、何か対策をたてては?

私は中国や台湾への輸出入をいろいろとやっていたのですが、書類、現地での連絡等を行っておけばとおるのは?普通の旅行では経験できないようなことを沢山させて頂きました。色々要望を書きましたが、これだけのプロジェクトを小人数で運営するのは本当に大変なことだと思います。幅広く活動されて、大変なこともしっかりと裏では山のようにあると思いますが、今後も頑張ってください。前さんの笑顔が最初にバンコクでお会いして見た時、「ああ、こういう人が(笑顔が)活動を進めて行く力のある人なんだなあ」と思いました。私も追いつけるように

頑張りたいと思います。

F AMDA スタッフとの交流会はとても有意義であり今後も続けていって欲しい。

現地での看護婦の役割が今一つはっきりしなかった（日本と比べても仕方がないが）。実際見学する時間が少なく、特に子ども病院ではもう少し時間がほしかった。希望があれば一日看護婦について仕事を見学等できるようにしてほしい。プロジェクトが多すぎるように思う。拡大していくことも大切だがもう少し現在のプロジェクトをじっくりやってみては…本部の担当が1人というのも、あれだけのプロジェクト数を考えたら負担が大きいと思う。

今年もミャンマーの看護婦を日本へ研修させる予定というが、前回苦労したという言葉等の問題は改善されているのか？

日本での研修が子ども病院でどのように生かされているのか教えてもらいたい。以上、生意気にも書いてしまいましたが、準備から本当にご苦労様でした。また機会があれば参加したいです。

G まだ気持ちの整理がついていないし、消化しきれてないのですが、1点、AMDA ミャンマーの活動が一方通行的な支配ではなく、AMDA スタッフと現地住民との両方向による調和で保たれ、支えられていることに感動しました。強制的な”支配”ではなく、ちょっとしたリーダーシップをとる、影の大黒柱、船頭としてプロジェクトの”方向付けをしてあげる”という活動を見て、AMDA spirit（精神）を心から理解することができました。

現地住民の方々の関心の強さに驚きました。（自主的に栄養給食をつくったり…）これからも実り多きプロジェクトがたくさんミャンマーに広がっていくことを願って止みません。

（文責：

コミュニティサービス局 前）



ミャンマー子ども病院を視察（スタディツアー3日目）
写真中央は昨年日本で小児科研修を受けられた
（左から）キンタンシン医師、ソーシュエイ看護婦、タンタンエイ看護婦



ミャンマー子ども病院
多くの方の協力を得て作られた、“AMDAお袋”（袋の中にタオルや文房具、石けんなど生活用品が入れてある）をツアー参加者から入院している子どもたちにプレゼント



メッティエラのAMDAスタッフとツアー参加者の意見交換（スタディツアー3日目）
「各プロジェクトに対するスタッフの思い入れがよく分かった」
「活動を通して医療の大切さを勉強している」
「自立性・持続性を考えて、希望の活動をしていることに驚いた」
「これからもミャンマーのことをもっと知りたい」etc

ホンジュラス便り

ホンジュラス事務所駐在代表 前田あゆみ

今は淡紫の花、ジャカラダの季節。オフィスのテラスから手の届きそうなところに大木があり、見るたびに心が和みます。景色の中でもう一つ目に付くようになったのは、橋の建設。2年半前のハリケーンミッチの際に破損したチレ橋の建設が日本政府の援助によって進行中です。

今回は3月にペルー支部とボリビア支部のメンバーを講師として招いて開催したワークショップについて報告します。

ペルー支部編

3月3日から8日までペルー支部のDr. ヨシ（日系3世）、心理学者ナディアがファシリテーターとなってエイズワークショップを実施しました。AMDA ペルーでは3年前から青少年対象のエイズ予防教育プロジェクトに取り組んでおり、今回のホンジュラス訪問は経験をシェアするためです。ヘルスポランティアを対象とした1日ワークショップ、ヘルスセンタースタッフ（看護婦、ソーシャルワーカー）、高校教師を対象とした2日間ワークショップには合計130名以上の参加者がありました。

～ワークショップの流れ～

自己紹介の後、早速体を動かします。

まずは“タイタニック”。これは日本でもお馴染みの

グループ分けゲームです。沈没しかけたタイタニック号の中を皆でさ迷いながら、ファシリテーターの拍手を合図に3人組み、5人組みなどを形成、余った人は外れます。余った人に対して“Que pena!(残念でした)”とみなで大合唱し、開始早々盛り上がります。

“点火”。全員が背中合わせに輪になり目をつぶります。輪の中にいるファシリテーターが誰にも気づかれないように一人の肩をたたき、その人がHIV感染者になります。目を開け輪を崩してみな握手を交わし始めます。この時感染者は指で相手の手のひらをこすります。これで相手も感染したということになります。新たな感染者が次の握手から手のひらをこすっていくと、30秒程度で半数以上の人が感染する結果になります。

その後、それぞれどう感じたかをシェアします。(最初の感染者に対し) 肩をたたかれた時どう感じたか。握手する時どう思ったか、怖かったか。感染した時どう反応したか。感染したグループに対して何ができると思うか、何を

してあげるべきか。感染した人によっては感染後誰とも握手しないようにした人もいれば、もっと感染させようとかたっぱしから握手した人もいました。シミュレーションとはいえども、かなりリアルな体験となりました。

フルーツバスケット、じゃんけんゲームなど数々のレクリエーションをした後、エイズ関連のビデオを見ます。女子高生がその場の勢いで関係を持ちエイズに感染するというドラマ仕立てになっており、ビデオを見た後の話し合いが重要、とヨシとナディアは強調します。

締めくくりは連帯感を高めるために、手をつなぎ人間の鎖をつくりながら一人ずつ感想を述べます。感動のあまり思わず涙ぐんでしまう人もいました。いつも家事だけで一日を過ごすので笑うことがなかったけど、今日は久しぶりに思い切り笑った、とあるボランティアの感想にみんな大きくうなずきます。



ペルー支部のファシリテーターによるエイズワークショップ

こういうタイプのワークショップに参加したのは初めて、目から鱗だったといった感想が多く聞かれ、楽しみながらエイズ、性について意識を高める、というワークショップの意図するところが参加者に伝わったと思います。

次のステップは、今後のコミュニティレベルでの活動に参加型手法（それも理論でなく、体験でつかんだ参加型。体験型とでも表現できるでしょうか）を取り入れていくことです。

ボランティアの中から地域の若者を集めて同じようなワークショップをしていこうというイニシアティブがうまれています。例えばピヤヌエバでは不良少年グループの闘争、レイプ、麻薬取引が深刻化しています。その中でグループと長年にわたって働いてきて、不良少年には母のように慕われているヘルスポランティアがいます。早速彼女（イサベル）は近所の少年・少女を自宅に招き、ワークショップを開きました。

ボランティアもヘルススタッフも青少年を対象に活動したいとは思っていても、どういう手法を用いたらいいかわからなかった、そんな時にこのワークショップが開催でき、いい取っ掛かりになったと思います。ヘルスセンターが地域の高校でワークショップを企画したりと、まさに地域と、ボランティア、ヘルスセンターが一体となってエイズ教育に取り組む体制ができつつあることは非常にうれしいものです。今後フォローしていきたいと思っています。

企業

三井海上火災保険（株）と
三井海上火災保険ハートクラブ

三井海上の三井海上ハートクラブは、三井海上の社員で構成される任意団体で、1997年2月に発足、現在2300名の社員が加盟しており、毎年着実に会員数を伸ばしている。

同クラブは給与の100円未満の端数プラス任意申し込み金額（1口100円）を毎月拠出し、障害者福祉、環境保全、高齢者福祉等の団体への寄付を中心に社会貢献活動を行っている。

寄付先の選定・実施については、会員の中から公募で選ばれた運営委員会が検討・決定している。

三井海上は、三井海上ハートクラブの活動を会社の社会貢献活動の柱と位置付けており、三井海上ハートクラブの活動を支援するため、同クラブとほぼ同額を寄付している。

（三友新聞ホームページより抜粋）

2001年3月、三井海上火災保険（株）様と三井海上火災保険ハートクラブ様より、AMDAの活動支援にと多額のご寄付をいただきました。

三井海上火災保険（株）様と三井海上火災保険ハートクラブ様からは、1998年パプアニューギニア津波緊急救援、1999年トルコ大震災緊急救援の際にも緊急対応としてご寄付いただくなど継続的にAMDAの活動をご支援いただいております。

三井海上火災保険（株）の皆様からのご支援をAMDAの緊急救援活動、またAMDA全般の運営費として大切に遣わせていただきます。有難うございました。

ボリビア支部編

ボリビア支部からは超多忙にもかかわらずDr. フォイアニーニ、Dr. ウスタレスが3月25日から31日まで救急救命セミナーのためホンジュラスを訪問してくださいました。AMDA ボリビアでは数年前から医師を対象にATLS、PHTLS（後述）のコースを実施しています。今回は初日から3日目までは赤十字、緑十字、消防隊の救急隊員とヘルススタッフを対象、最終日には医者を対象とした研修を実施しました。

研修内容

● BLS (Basic Life Support ~基礎救命)

気道確保と人工呼吸、体内に入った異物の除去などについて、アメリカ赤十字社のビデオ教材を使用した講義と、成人・小児・乳児のマネキン等を使用した実技を実施。2日目には1日目に講習を受けた救急隊員がヘルスセンタースタッフに対して指導。

● PHTLS (PreHospital Trauma Life Support ~病院搬送前救急救命)：裏表紙参照

災害現場から病院に搬送するまでの応急措置(患者の評価、気道確保、人工呼吸、外傷物理など)

● TEAM (Trauma Evaluation and Management ~外傷評価・処置研修)

外傷物理、外傷評価・再評価、身体チェック(頭部、胸部、筋肉、骨、神経系等)、出血コントロール、搬入前・病

院内準備など

● ATLS

(Advanced Trauma Life Support ~上級救急救命研修)

外傷の評価と応急処置、気道確保と人工呼吸、ショック、胸部・腹部・頭部外傷、小児外傷、妊婦外傷、熱傷など

Dr. フォイアニーニはホンジュラス救急隊員のレベルの高さに感心していました。テクニックもわかりですが、規律の良さに驚きです。ホンジュラスで参加者が時間通りに集まったのは今回の救急隊員対象セミナーが初めてでした。非常に熱心に講義に耳を傾ける若者たちを見て、ホンジュラスの未来も明るいなど、感じました。

救急隊員によると、事故現場での応急措置はしっかりしていても、病院の緊急ユニットにいるのが医学生のみである場合も多々あり、それが患者の運・不運を左右するという話。また医師の対応も満足できるものではないとのことでした。今後は医者レベルのトレーニングが重要であるといえます。今回のTEAM講習会には準看のストライキ中であるにもかかわらず国立エスクエラ病院、私立ピエラ病院、ヘルスセンターなどから医者32名の参加があり、非常にいいスタートとなりました。上記の研修のうちATLS/PHTLSについては今回はコース紹介のみでしたが、今後医療関係者を対象に実施していく計画です。長い間赤十字のボランティア育成に関わっているDr. オレヤノスという熱心な先生にも出会えたので、心強い限りです。熱心といえばDr. フォイアニーニのバイタリティにも感心してしまいます。若さを保つ秘訣を聞いたら“常に情熱を持ちつづけること”だそうです。

地域

高校生パワー発揮!!

ボランティアサークル pupae
佐々木奈緒

3月27日、岡山県北部の津山市で高校生ボランティアサークル“pupae”が中心となり、AMDAのプロジェクト支援のイベントを行いました。

1月上旬、私は初めてAMDAの本部を訪問しました。以前からAMDAの活動に興味があり、また、ホームページでAMDA高校生会の活動を知っていたので、私にも何かできることがないだろうか、と思ったからです。本部でお話を伺った時、高校生の私たちにも、活動資金の面で協力ができることを知り、また、津山でもっとAMDAのことを知ってほしいと思いました。

友達と2人で相談し、高校の枠を超えた高校生ボランティアサークル“pupae（ピューピー）”を結成し、その初めの活動として、AMDAに協力するイベントを行うことにしました。全てのことが初めてで、何もわからないまま、AMDAの方と連絡を取り合いながら活動を始めることになりました。イベントの場所はジャスコの一角を貸していただけるということで、さっそく仲間集めを開始。チラシを作り、手渡しで参加の協力を呼びかけました。対象は美作地区の高校生。何人集まるのだろう、と期待と不安を抱きながら、休み時間はあちらこちら走り回っていました。気がついたら10人、20人と仲間が増え、イベントを行う時には、参加者は7校90人以上にも増えていました。

2月20日、AMDAからの提案もあり、AMDAと、支援するプロジェクト“バン格拉デシュABC”についての勉強会を行いました。その時点までのpupaeの会員、知人、また新聞報道により知った方々が、中学生から大人まで約40人参加しました。AMDAから小池さんと藤田さんに来ていただいて話を聞き、自分たちが行っていることの大きさ・大切さを実感し、さらにやる気が出ました。

3月17日・18日には、ジャスコの一角で、バザーの品物を集めました。ポスターや新聞を見て来てくださった、初対面の方々に、“頑張ってるね、応援しているから”と温かい言葉をかけてい

ただき、元気が出ました。学校によっては先生に協力を呼びかけたり、地域の人や商店街などにまで呼びかけて、品物を提供していただきました。そうしているうちに、どこからこんなにも集めてきたのだろうというように、バザーの品物が続々と集まってきて、ただひたすらびっくりするばかりでした。

いよいよイベントが目の前になり、不安と焦りを感じながらも、一生懸命準備に走り回ってくれている仲間の姿に元気をもらい、できる限りのことをしようと心に決めました。勉強をする間もなく1日が終わってしまい(笑)、寝る間を惜しんで準備をしました。

24・25日、二日かけて値付け。本当に終わるのだろうか、というくらい、バザーの品物がありました。そして26日は、ジャスコで準備。大人の方に車を出していただき、バザーの品物を全部運びました。AMDAの活動写真を貼ったり、ワゴンに品物を並べてセッティングをしたり。予想以上に時間がかかりました。準備が全て終わり、イベントの会場を見回したときには、ここまでやり遂げたんだ、とすごく感動しました。

当日は楽しかったの一言です。開店前に伴場さんとAMDA高校生会の3人に来ていただき、約90人の高校生が参加しました。なんと開店前からバザーのために並んで待っていたお客さんもいたと後で聞きました。1時間半交代で、各学校がそれぞれの時間を担当しました。3ヶ所の入り口では手の空いている人が募金を行い、とてもにぎやかでした。心配していたお客さんの数ですが、ジャスコのお客さんが立ち寄ってくれたり、わざわざバザーのためにジャスコに足を運んでくださった方も多数いて、とてもうれしかったです。日ごろおとなしい(と思われていた人が)大きな声を出して募金のお願いをしてくれたり、男子が重い荷物を運んでくれたり、と参加した高校生一人一人がそれぞれの力を発揮しました。

AMDAを通じて誰かの役に立ちたい、と高校生みんなが自分の力を発揮



しているその時点で、このイベントは成功だ、と思いました。途中、全部売り切れるかな、と思っていたバザーの品物もどうにかほぼ終わり、自分たちの想像を越えたお金が集まりました。1日中交代で立っていた募金は、いままでのAMDAのイベントの中で最高だとか。みんな、ただ自分たちがやり遂げたことに驚いていました。そして、自分たちでもこんなにすごいことができるのだと、自信ができました。イベントの準備をする中で大変だったことは、連絡を取り合うことでした。他校とは代表者会をし、各学校では集まって話し合いを重ねました。しかし、部活などで話し合いに全員参加できなかつたり、人数が多かったので連絡が全員に行き届かなかつたこともありました。また、学校の勉強をする時間が取れず、たまっていく課題に焦りを感じました。このような活動は勉強と同じくらい、いや、それ以上に大切なことだと思っていたにもかかわらず“私はこのようなことよりも勉強をするべきなのか”とも思いました。親に励まされ、何とか乗り切りましたが、このように勉強に追われ、ボランティアなどが気軽にできないのが現実です。

このイベントを通じて一番楽しかったことは、多くの仲間に出会えたことです。当日初めて会った人もたくさんいました。90人も高校生が、ボランティアをしようと集まったのです。そして、私たちの周りには、私たちがしようとするのを理解し、応援してくれた方々がたくさんいました。このような全ての方々のお陰で、このイベントは成功しました。私たちはAMDAに協力するボランティアをするつもりでしたが実際は、このイベントを通じて色々なことを学び、経験し、人のためにしたんだという気は全くしていません。これこそ本当のボランティアなんですよね。色々大切なことを学びました。協力し、応援して下さった皆さん本当にありがとうございました。

人・海外往来

(2001年1月16日～4月15日)

*緊急救援



カンボジア
障害者への巡回診療



コンゴ
診療所再建



ケニア
女性自立支援



ホンジュラス
生活上支援
(排水溝建設)

アジア	ネパール	辻井美由紀 (インターン) 高野 篤 (医師) 鈴木 俊介 (AMDA スタッフ) 若山由紀子 (医師) 上住 純子 (看護婦) 小田 容子 (公衆衛生) 小倉健一郎 (医師) 平野 容子 (看護婦)
	ミャンマー	小林 哲也 (駐在代表) 川口まり子 (看護婦) 前 喜美 (AMDA スタッフ) 橋本 直子 (看護婦) 和田 宣子 (管理栄養士) 山本知恵子 (インターン) 山本 容子 (インターン)
	カンボジア	藤野 康之 (調整員) 青木 真祐 (インターン) 伴場 賢一 (AMDA スタッフ)
	ベトナム	川村 栄次 (駐在代表)
	バングラデシュ	錦織 信幸 (医師) 寺村 知子 (医師) 戸倉 愛 (看護婦) 伴場 賢一 (AMDA スタッフ)
	フィリピン	小平 雄一 (AMDA スタッフ)
	インド	小平 雄一 (AMDA スタッフ) * 藤田真紀子 (AMDA スタッフ) * 原口 珠代 (看護婦) * H.S. Sharma (医師) * 大野耕四郎 (両備バススカイサービスサプライズ社) * 若山由紀子 (医師) * 三宅 和久 (医師) * 鈴木 俊介 (AMDA スタッフ) * 高瀬かおり (AMDA スタッフ)
	パキスタン	
ヨーロッパ	コンゴ	濱田 祐子 (駐在代表代行)
アフリカ	ケニア	林 信秀 (駐在代表) 横森 佳世 (新駐在代表) 横森 健治 (調整員)
	アンゴラ	谷合 正明 (駐在代表)
	ルワンダ	田中 一弘 (総務会計)
	ルワンダ	林 信秀 (ケニア駐在代表)
	ザンビア	横森 健治 (調整員) 近藤 麻理 (看護婦) 林 信秀 (ケニア駐在代表) 横森 健治 (調整員)
	JICA ザンビア	畑 久美子 (看護婦) 佐々木 諭 (調整員) 妹尾 美樹 (保健教育) 広田 眞美 (公衆衛生)
	ジブチ	岡安 利治 (住民参加型環境衛生) 平松 利佳 (インターン)
中南米	ホンジュラス	前田あゆみ (駐在代表) 伴場 賢一 (AMDA スタッフ) 近藤 麻理 (看護婦) 富岡 洋子 (AMDA スタッフ) 侯崎希代子 (看護婦)
	ボリビア	近藤 麻理 (看護婦) 富岡 洋子 (AMDA スタッフ)
	エルサルバドル	比屋根 勉 (医師) * 侯崎希代子 (看護婦) * 加川 洋 (調整員) * 伴場 賢一 (AMDA スタッフ) * 前田あゆみ (ホンジュラス駐在代表) *
中近東	イラン	佐伯 美苗 (AMDA スタッフ)

人

14

AMDA インターナショナル名誉顧問紹介

Dr. Khan M. Zaman

AMDA インターナショナル事務局長

Dr. Gerard C. Bodeker

オックスフォード大学グリーン・カレッジ

Dr. Gerard C. Bodeker は土着の保健システムに関係した国際保健政策が専門の社会学者である。現在、オックスフォード大学医学部公衆衛生科の講師であり、同大学の保健志向カレッジであるグリーン・カレッジの特別研究員でもある。また、伝統医学における国際保健政策プロジェクトである GIFTS (Global Initiative For Traditional Systems of Health/ 伝統的保健システムのグローバル・イニシアティブ) を 1993 年に創設し、自ら会長を務める。50 歳。

略歴は下記の通り：

学歴

- 1972 年 ウェスタン・オーストラリア大学にて心理学学士号取得
- 1974 年 ウェスタン・オーストラリア大学にて臨床心理学修士号取得
- 1986 年 ハーバード大学にて教育学修士号取得
- 1989 年 ハーバード大学にて教育学博士号取得

職歴

1976～99 年 ウェスタン・オーストラリア大学卒業後、オーストラリアで臨床心理医を務める。その傍ら、母子保健プログラムの設立や保健教育プログラムを通してアポリジニのコミュニティの福祉改善に携わったり、ハーバード大学で研究を行ったりと精力的に様々な活動を行う。世界銀行や国連開発計画等国際機関のコンサルタントとしても活躍する。

現在は、以下のような役職についている。

- 1993 年～現在 オックスフォード大学グリーン・カレッジ 特別研究員
- 1993 年～現在 オックスフォード林学研究所準会員
- 1993 年～現在 GIFTS (Global Initiative For Traditional Systems of Health/ 伝統的保健システムのグローバル・イニシアティブ) 会長
- 1998 年～現在 国連開発計画顧問
- 1998 年～現在 オックスフォード大学国際開発センター、クイーン・エリザベス・ハウス上級研究員
- 1998 年～現在 伝統医学システム英連邦ワーキング・グループ長
- 1999 年～現在 オックスフォード大学医学部公衆衛生科講師

出版物

世界各地の伝統医学、薬草や熱帯病医学について定期刊行誌で論文を多数発表しているほか、本の出版も数多い。



アムダ・インターナショナルはアムダの名誉顧問をお願いしている方々をシリーズで紹介している。今回はその第 14 回目として Dr. Gerard C. Bodeker と Prof. Terence J. Ryan の二人を紹介する。

Prof. Terence J. Ryan

オックスフォード大学皮膚科学部名誉教授兼名誉顧問医

Prof. Terence J. Ryan はオックスフォード大学皮膚科学部名誉教授兼名誉顧問医、オックスフォード・ブルックス大学ヘルスケア学部名誉教授、さらにオックスフォード大学グリーン・カレッジの元副学長で現在は同カレッジの名誉教授である。1932 年生まれ。略歴は下記の通り：



名誉職

ジェファーソン医科大学 (米国フィラデルフィア) 非常勤教授
マイクロサーキュレーション研究所 (北京) 名誉教授

国際皮膚科学会における役職

皮膚科学国際委員会会員
皮膚科学国際財団会長
皮膚科学国際協会名誉会長
12 の皮膚科学協会の海外名誉会員
国立医学学会 (ベネズエラ) 海外通信会員
国立医学学会 (ブラジル) 海外名誉会員

過去の役職

英国皮膚科学者協会会長
ヨーロッパ人体組織治療協会会長
英国マイクロサーキュレーション協会会長
ヨーロッパ・マイクロサーキュレーション協会会長
世界マイクロサーキュレーション学会会長
ハンセン病関係における活動
セント・フランシス・ハンセン病協会名誉医学顧問
LEPRA 医学諮問委員会メンバー
ハンセン病プログラムの持続性に関する ILEP 委員会メンバー (1995 年 11 月アムステルダム)
世界保健機構 (WHO) 第 7 回ハンセン病諮問委員会メンバー (1997 年 6 月ジュネーブ)

その他の活動

伝統医学と西洋医学の融合促進を目指す GIFTS (Global Initiative For Traditional Systems of Health/ 伝統的保健システムのグローバル・イニシアティブ) の理事として世界を飛び回っている。

出版物

皮膚科学、外傷治癒、マイクロサーキュレーション、リンパシステム、ハンセン病、伝統医学などについて 500 以上の論文を執筆している。

事務局便り

3月24日に発生した震度5におよぶ芸予地震では中国地方のAMDA会員の皆様の中にも被害に遭われた方が多くいらっしゃるのではないのでしょうか。一日も早い復興をお祈りするとともに、被災地の皆様にお見舞い申し上げます。

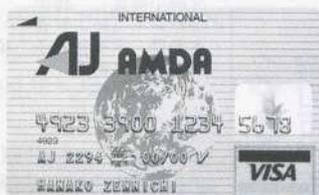
新年度が始まり、AMDA会員の皆様も新しい生活を始められた方がいらっしゃると思います。AMDA事務局でも新しいボランティアの皆さんに登録をお願いしております。具体的にはAMDA事務局内でのコンピューターの打ち込み業務、事務補助業務、イベント時の手伝い、あるいは緊急救援時サポーター等の登録です。

さらに新規AMDA会員、AMDA高校生会員へのご入会も併せてお願いしております。

どうぞAMDAの活動をご理解くださり、ご登録、ご入会下さいますようお願いいたします。



*ご入会、会費、ご寄付、その他ご購入のための振込は、本誌綴じ込みの郵便振替用紙をご使用下さい。連絡欄に振込目的を明記して下さい。



* 全日信販のAMDAカード (クレジットカード)

ご利用額の一部がAMDAに寄付されます。

AMDAカードについてのお問い合わせは、
全日信販株式会社 本社営業部
086-227-7161 です。



AMDA事務局ボランティア登録

ボランティア活動が可能な曜日、時間あるいは業務を登録の際に記入していただき、日程等にあわせて事務局内でお願いする作業を準備します。

イベントボランティアの場合にはその都度連絡させていただき、ご都合にあわせて日程等を決めさせていただきます。

緊急救援サポーター登録

緊急時のご寄付や物資の提供、あるいは国内作業にご協力いただける方にご登録していただき、AMDAが緊急救援活動を開始した際にAMDAホームページや速報等でご協力を呼び掛けます。(予め予想出来ない活動ですから、その時に活動できる方のみをお願いすることとなります。)

AMDA会員募集

本誌綴じ込みの郵便振替用紙裏をご参照いただき、同用紙にご記入のうえ、会費をお振込いただき、ご入会手続きとなります。既に会員の皆様はお知り合いをご紹介下さい。

AMDA高校生会員募集

今月号で掲載しましたように、AMDA高校生会は地道な活動を続けております。学年交代の現在、会員が少なくなっております。活動は高校2年生までですので、新1、2年のご入会をお持ちしております。

AMDA国際スタッフ募集

本誌13ページをご参照ください。

登録先・お問い合わせ先は：

AMDA事務局 TEL 086-284-7730

FAX 086-284-8959

AMDA ホームページ
<http://www.amda.or.jp>

本紹介

「いきなり国際ボランティア」

旧ユーゴスラビアに行く

淀川 直美

本体価格1,800円+税 ◇ 株式会社 シーエムシー 発行



2001年は、国連採択“国際ボランティア年”

- ★ “平和を守る努力は惜しんではいけない” 戦禍の国・旧ユーゴスラビアから平和な国・日本への厚いメッセージ。
- ★ 初めての難民救援ボランティア！感動と涙の悪戦苦闘奮戦記



ポリビア 病院搬送前救急救命研修

みなさんのちからを
必要とする人たちがいます



AMDA募金箱を置いていただける方はご連絡下さい (TEL 086-284-7730)